

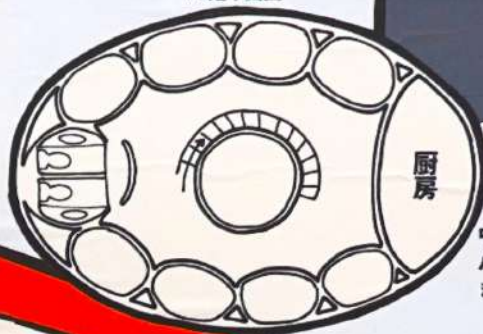
寿司オケ

寿司も歌も心ゆくまで

寿司×カラオケという伝統日本と近代日本の奇跡のコラボレーション

楕円形の“シャリ型”カラオケルームを配置し余剰スペースには回転寿司の機構を収めて効率的に活用。

▼2階平面図



▲2階内装

中央にはのりまきをモチーフにしたパーティールームを設け、最大20名までノリノリに楽しめる空間。

新構想 カラオケ×寿司

窓際を回転寿司仕様とし、注文した寿司がコンベアを通じて各部屋の“寿司取り口”に直送される。店員の出入りをなくし歌の最中に中断されることを防ぐ。さらに窓のないカラオケ室の特徴を活かし、壁際をレーンが運ることで寿司の鮮度を維持する。

大きく開いた口をモチーフにしたエントランスは“歌っている”ようにも“食べている”ようにも見えるデザイン。縁には五線譜を横した窓をあしらい、音楽性と遊び心を表現。

お茶をモチーフにした円形ステージ。歌や演奏を行う姿が“茶柱”のように立ち上がり縁起の良さを感じさせる。

寿司ネタをモチーフの大きな屋根を等間隔に配置された柱が日差しを和らげ風通しの良い涼感を演出する。

建物を支える寿司下駄モチーフのピロティ部分を駐車場とし、遠方からでも気軽に訪れやすい。

曲線的にデザインされた小上がり座敷で畳に腰掛けながらステージを眺め食事が可能。

▼1階内装

ステージ

厨房

▲1階平面図

艦形船を思わせる長机を囲み、歌と食事を同時に楽しめる賑わいの空間。大きな窓から海を見ながら食事が可能。

エレベーターを設置し、年齢や身体条件を問わず安心して利用できる。

正面へと開かれた階段は来訪者を迎え入れるような開放感を与える。二手に分かれた階段が一つに合流する形は、人と人とのつながりや出会いを象徴するデザイン。

◀首都圏近郊の海沿いに位置し、窓からは海を一望できる。道路や商業施設が隣接しアクセスにも優れた立地で、漁港で水揚げされた魚を思わせる新鮮さを演出し、寿司の魅力を最大限に引き立てる。

寿司と歌で
繋がる空間

コンセプト



スズムシ



モズ



トキアカネ

秋は、夕暮れ。 ～省略～ 日入りはてて、風の音、虫の音など、はた、音ふきにあらず。

これは、枕草子の一文である。日本では音から虫の声を味わう文化がある。また、虫の音は西洋人には聞こえないらしい。

正確には、西洋人は虫の音を機械音や雑音と同様に音楽誌で処理し、日本人は言語誌で受けとめる。

この建築物は、そんな虫の声を存分に味わいながら心身をリフレッシュできるリトリートセンターである。



音が集まる

人が集まる

虫が集まる

つど

集

すだ

うく虫 人

庭園

庭園には数々の虫・鳥の音が響き、賑やかかつ、穏やかな時間が流れている。向かいの建物には自然を肌で感じられるような開放的な空間が広がる。



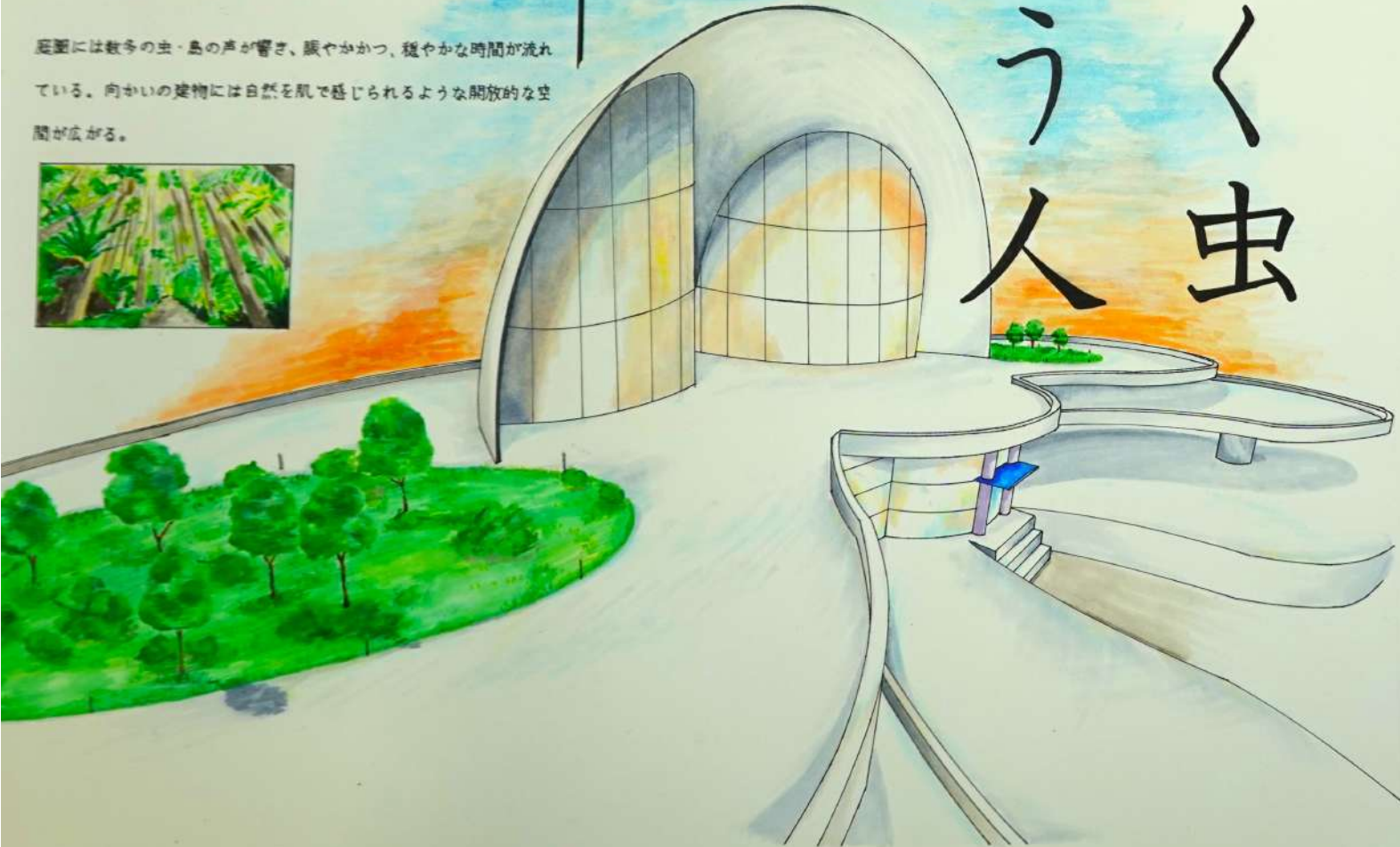
この建築物は、音を集める音楽堂が透形モチーフになっている。音楽堂の特徴として、音響をよくするための天井がアーチやドームの形、正面から見て左右対称で、堂々とした外観、観客がステージを囲むように配置されている。これらの特徴を組み込み、ドーム型、シンメトリ、グインヤード型ホールとなっている。



モリゴリス

内観

内観には音楽堂の音響的な特徴を生かし、心地よい音環境を生み出す。曲線で包み込むような優しい空間を形成。透明なガラス壁や大きな開口部で自然光を取り入れ、自然環境との一体感を強調している。





TAKE ROOT

- 竹で根づく建築 -

コンセプト

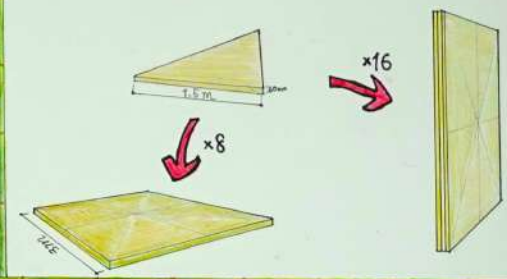
近年、全国で問題となっている「放置竹林」は、生態系の破壊や災害リスク、景観悪化を招いている。竹の需要減少や高齢化により管理の担い手が不足し、竹林は年々拡大している。

この問題を解決するには、「竹を定期的に大量に活用する仕組み」が必要不可欠である。

そこで、問題の進行状況に応じて「招集」「伐採」「活用」「保全」の4フェーズを設定し、それぞれに対応する機能を持つ空間を段階的に組み替える。

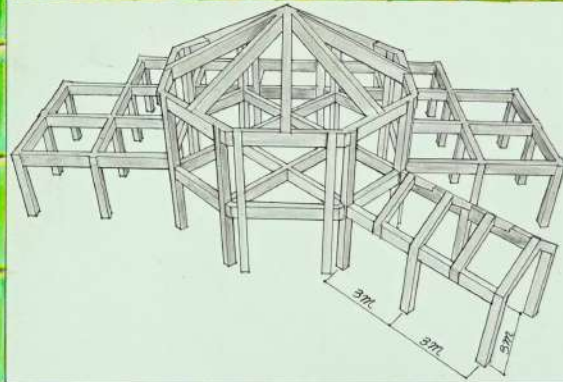
竹を起点に住民が関わり続け、持続可能な課題を解決できる拠点としてこの建物を計画した。

伐採された竹の大量消費と資源循環の両立を図るため、床・壁両用の竹製三角部材を新たに提案する。基本形状は、一辺1.5mの直角二等辺三角形。8枚で3m角の区画を構成する。継ぎ手により組み換えが自在で、間取り変更の仕組みの核となる。三角形の斜辺が交差するように重ね、壁としても利用できる。施設内での実装と運用を重ね竹建材の全国的な標準化を目指す。



静岡県浜松市周辺は農地や里山に広がる放置竹林が増え続けており、景観や生態系に深刻な影響を及ぼす。

高齢化と担い手不足で管理が難しくなり、竹の活用と地域交流を促進する拠点として適した地域のひとつと考えた。



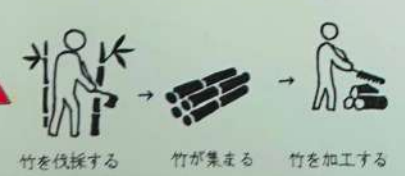
本施設は3m角の立方体ユニットを組み合せ、中央に正八角形の広場を配置した構成とする。長期的な課題解決に対応するため、骨格はコンクリートとし、スケルトンインフィルを採用して、用途に応じて間取りが変化するように、内部には可動式の竹の床・壁を用いた。竹は構造材に適さず耐久性も低いため、可変的な美素材として活用している。公共施設として、時期や目的に応じて、空間を組み替えながら、地域に持続的に寄り添う建築を目指した。



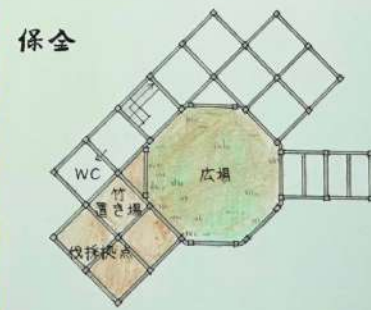
地域に無関心な人々を引き寄せるため、日常に溶け込む「地域食堂」を中核に配置。展示や情報掲示で竹林への関心を促し、人と自然のつながりが芽生えるきっかけとする。



繁殖しすぎた竹を減らすことが課題の第一歩。作業拠点や休憩の場を備えた施設を整え、伐採活動を地域で継続できる体制をつくる。地域ぐるみで竹林問題に取り組む段階。



伐採した竹を有効に活用しなければ意味がない。建築資材や竹細工、体験を通じて再価値化する。地域資源としての竹に新たな需要を生み出し、暮らしと文化に再び根づかせる場とする。



放置竹林が減っても、放置すれば元に戻る。良い状態を続けるための管理と保全を行う。中央に遊具を配置し子どもの遊び場とし、学び場や竹伐採の拠点としても機能させる。



この取り組みが一つの地域にとどまることなく広がっていき、それぞれの土地で竹と人々が新たな関係を築くことを願う。



全国に広がる

つなぎのかたち

～和紙でおりなす、人と時を結ぶ空間～

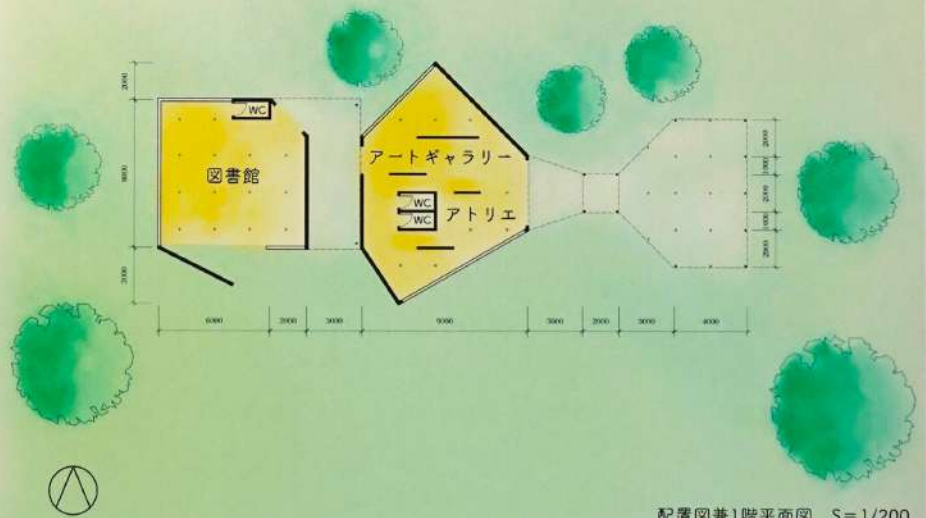


01.コンセプト

デジタル化が進む現代において、紙に触れる機会は減り、また、人との関わり方も変化したことで、人と人とのつながりも薄れてきている。それらを取り戻すため、日本の文化を支えてきた「和紙」と「手仕事」を軸に、常に変化し続ける建築を提案する。

図書館とアートギャラリーを併設したこの建築は、折り紙をモチーフにした外観となっている。建物内部や屋根の下の地面には、一定間隔で穴があけられ、そこに支柱を立てて和紙を張ることで、誰もが自由に空間を仕切り、光や風の通り方を変化させることができる。また、分棟の間に生まれる斜面や軒下の空間は読書スペースや交流スペースとして活用され、人と人を緩やかにつなぐ。昼は和紙を透過した柔らかな光が内部空間を包み込み、夜には内部から光が溢れる「現代の行灯」として地域に温もりを与える。季節や人の手によって姿を変えるこの仕組みは、建築そのものが時間とともに「織りなされていく」ことを象徴している。

紙を「折ってつくった」ような外観の建築、そして、和紙によって人と人、過去と未来、内と外、さまざまなものを「つなぎ」、"織りなす"空間。そんな、紙と人が重なり合って生まれる、「変化を受け入れながら育ち、つなぎ建築」を提案する。



配置図兼1階平面図 S=1/200



02.「折り」の間に生まれる空間

折り紙をモチーフにし、分棟配置にすることで、建物の間には自然と斜面に囲まれた小さな谷のような空間が生まれる。周囲の柱に和紙を張ることで、光を柔らかく透かす半屋外空間を形成。和紙の数や大きさ、位置、張り具合などを調整することで、その時々にあった姿に変化することができる。棟と棟をつなぐ通路としてだけでなく、光と風を感じながら本を読んだり、交流したりできる穏やかな中間領域となり、人と人、建物と自然を緩やかにつなぐ空間を作り出している。



03.和紙を重ねて作る「アートの天井」

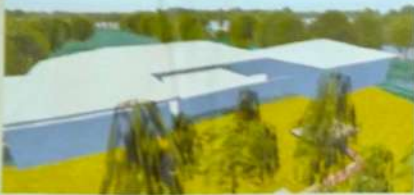
アートギャラリーのある棟と、その東側の空間の間には薄い和紙がかかっており、破れたり汚れたりして使わなくなった和紙をちぎってそこに貼り付けることで、みんなで作るアートの天井を設ける。届きやすさの違いにより、貼られる和紙の量が変わるため、下部は色濃く、上部は光を透かすグラデーションが生まれる。天候により強い膜が和紙を守りつつ、光がさす色彩が空間全体にじみ出す。季節ごとに貼り替えれば、その時々景色をみんなで作り出す参加型の作品となる。



04.空間を分ける「和紙のカーテン」

室内や屋根の下の地面には一定間隔で差し込み穴が設けられていて、利用者が支柱を立てて和紙をかけることで、自ら空間を仕切ることができる。建物内にある固定された壁に対し、自由に動かせる和紙の仕切りは、ゆらぎを際立たせるとともに、空間にリズムを生む。和紙の張り方やたるみ具合、光や風、用途や人数などに応じて柔軟に姿を変えるこの仕組みは、将来のニーズの変化にも応えつつ、建築と人がともに成長し、手仕事を通して日本のものづくりを実感できる場となる。

○提案主旨



本計画は、高知郡四万十川沿いの道の駅を、地域資源の展示と遊覧利用をテーマに再生することで今と未来を『結び』、ヒノキ・竹・和紙・石などの素材を構造・仕上げ・空間演出に用い、建築そのものが展示空間として地域の恵みを伝える。足湯や料理亭、和室、イベント空間を備え、訪れる人が滞在しながら、素材と風景の調和を体感でき、滞在できる道の駅を目指した。



○提案による変化



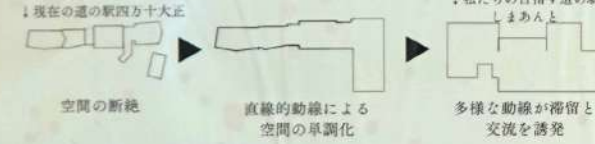
○野外提案

- ・大型車両用の駐車場拡大
- ・車からでも四万十川を望めるよう、木の開伐
- ・季節の植物の種類増加



四万十の素材が未来の風景になる

○形態ダイアグラム



○材料紹介

・檜

清らかな香りと強さを持ち、構造・内装を支える素材。滞在の心地よさを生み、地域資源の価値を伝える役割を担う。

・竹

再生可能で軽やかな素材。竹細工等の伝統技と組み合わせ、身近に感じられる風情として、地域と未来をつなぐ存在となる。

・石

地域の景観に届け及む重厚な素材。大地のつながりを感じさせ、長く残る場として、自然研磨による形の進化と共に道の駅を支える。

・和紙

柔らかな光を透過し、人を包み込む穏やかな空間をつくる。素材の魅力を感じ、伝統と未来を結ぶ展示の一部へ。

○要所施設

・灯葉亭 ~四季と和の心味わうお食事亭~

コンセプト個室
石・漆
竹・障
土佐和紙・燈
ヒノキ・檜

柿の丸ごとゼリー

柿のチーズケーキ

鯛の蒲焼き

四万十の素材を活かした「灯葉亭」は地域の自然と建築が調和するお食事亭。柿・竹・和紙・石といった素材がもつ特性を空間に取り込み、光・音・香りもデザイン。人と素材が共鳴する新しい場を創出します。

・材光展 ~光で魅せる地元の材~



「材光展」は、地域資源を照明で再解釈し、素材の質感と陰影を際立たせる展示です。光による空間演出で、地域資源の新たな価値を提示します。

展示資源・販売品物

a. 高知産ラバキヒ花崗岩 キャンドルホルダー

b. 高知特産ヒノキ+土佐和紙のランタン

・土佐和紙のポストカード

・名産お菓子

・竹細工のバスケット

・竹細工のカトクリー

高知ミニギフト

・木のコースター

かごりん

・お菓子、茶葉

・柚薫庵 ~足湯で高知感じる~



○提案意匠

四万十でやる意味
豊かな自然素材と文化が残る地。地域前掲型の建築を実現できる場所。

滞留を生む意味
建築そのものを展示とし、素材の価値を体感してもらう。

地域素材を使う意味
通過点から「滞在の場」へ、地域との関係を確める拠点に。

素材を展示する意味
観光と暮らしが交わる場所に、記憶に残る場を創る。

住民と観光客を結ぶ意味
土地と建築を結び、産業と文化を未来へつなぐ。

高知県 高岡郡四万十町大正

01. コンセプト

かつての日本では人と文化を結ぶみんなの場が多く形成され、地域交流が盛んに行われてきた。日本古来の結いの精神は、現在まで引き継がれている。しかし、人口減少や少子高齢化の進行による後継者不足や若者の都市部への一極化が深刻な問題となり、地域の活力低下を招いた。計画地である焼津市も例外ではなく近年の漁師の著しい減少に伴い水産業の衰退が進んだことで、市民の郷土愛が低下していった。そこで、かつての地域の人々を結ぶ、みんなの家のような空間を計画し、衰退した伝統文化を盛り上げ、みんなで地域の産業の魅力を語り合うことができる結い空間を持つ建物を提案する。

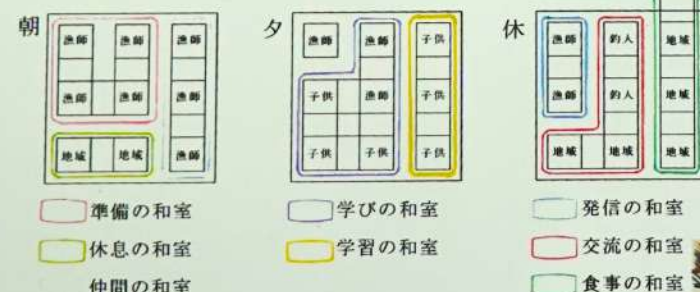
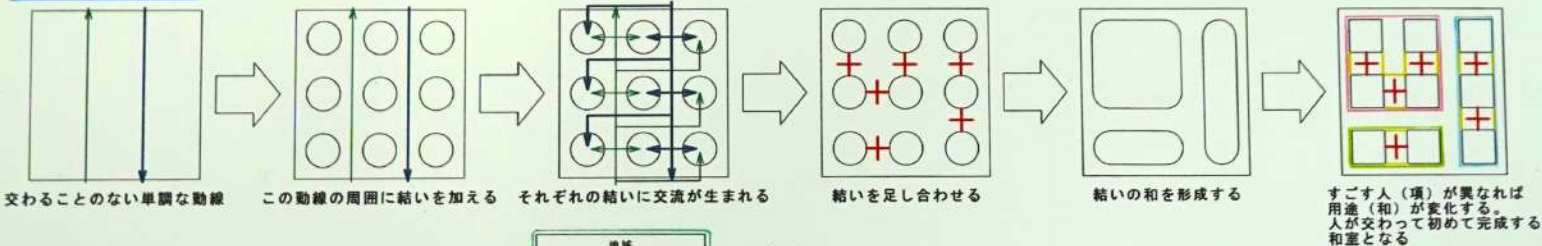


02. 計画地



計画地の西側には焼津駅や市街地、北側と東側には漁港、南側には小学校を中心とした住宅街とさまざまな人々が行き交い、温かいコミュニティがつけられてきた場所である。漁港から漁師、住宅街から地元住民や児童・学生が、祭りの際には市外からも人が集まることが期待される。

04. ダイアグラム



「結い」

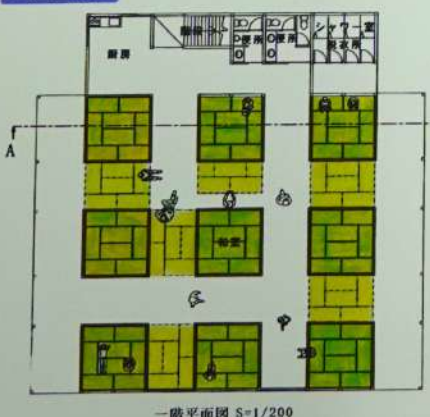
焼津の漁業は仲間と力を合わせて成り立ち人との結び合いの文化を育んできた。そこで生まれた精神を建築にも込め、畳ユニットを「結い」とした。畳は世代や立場を超えて同じ高さで向き合う場をつくり、小さな「結い」を合わせることで地域の未来をつなぐ大きな和となるだろう。



結いの配置と変化

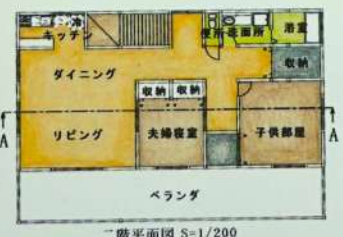
一階パブリックスペースの三和土には畳を敷いた和室空間を配置した。漁師や職人、学校帰りの学生など、地域の住民が自由に入出りのできる開放的な空間とした。これにより地域住民が疲れを癒しつつ、コミュニケーションを交わし漁業文化に触れる「体験学習の場」として機能する。地域の人々がつながるみんなの玄関である軒を深くしながらも一歩足を踏み入ると、開放的な室内空間が広がる。快適性を確保し精神的にリラックスできる空間としたことで、地域の活力である若い世代が漁業に興味を持ち、漁業文化が再び盛り上がる事が期待できる。

05. 平面図



九つの結いと八畳の空間

地域コミュニティは、長屋に敷かれた畳に商人や庶民が集うことで「結い」の精神を形づくってきた。八畳の空間は客間として機能し、地域住民の居場所となって地域のつながりを生み出した。九つの「結い」の下部に設けた移動可能な畳により空間は形を変える。空間を再定義することで、新たなコミュニティを形成し、人々とのつながりを広げていく。



06. 断面図



藪戸の活用

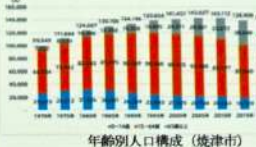
「結い」の入り口には藪戸を設けることで、内部空間の行き来を可能とし、通風と採光を確保し、室内の賑わいを演出する。四季の変化や空間の用途に応じて開閉することによって「結い」のつながりにも変化をもたらす。

Made with Local 畳で結う和する地域拠点



03. 課題

2つのグラフから、焼津市内の漁業関係体数や漁獲量はともに減少傾向にあることがわかる。この傾向は漁業の担い手不足を示しており、焼津市における地域産業や食文化の存続に大きな影響を及ぼす。特にカツオやマグロを中心とした漁業の衰退は、全国的に知られる「焼津の町」のブランド力を低下させ、観光資源の魅力を失わせる可能性がある。さらに、魚食文化や港まつりが廃れ、地域固有のアイデンティティの喪失が懸念される。こうした漁業の衰退は、単に産業の縮小にとどまらず、焼津が誇ってきた「港町としての魅力」を根本から揺るがす深刻な課題となる。



一階平面図 S=1/200

A-A断面図 S=1/200

Re: NAGAYA

～長屋からはじまる定住～

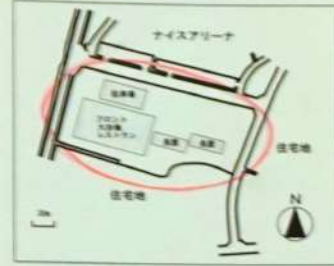
この旅館は、テーマ「MADE in JAPAN」に基づき、日本独自の建築形式である、長屋をモチーフにしている。かつての長屋は、家と家が壁一枚でつながり玄関先での挨拶や物の貸し借りなど日常の中に交流があった暮らしのかたちだった。その程よ近い近さや温もりを現代の宿泊施設に再構築(Re)し、人と人、地域と訪問者が緩やかにつながる旅館を提案する。

建物には地域の木材や和紙などの秋田の素材を用い、縁側や土間スペースでゆったりと過ごしてもらえるような設計にする。さらに、ベランダや露天風呂では、秋田の自然や魅力を感じられる空間を目指す。「治まる」だけでなく、「働く」「話す」「関わる」を楽しめる場所として滞在者が「訪れる人」から「このまちに関わる人」へと変わっていくような空間を目指す。



北側立面図 S=1/150

1. 計画地



秋田県由利本荘市石蔵

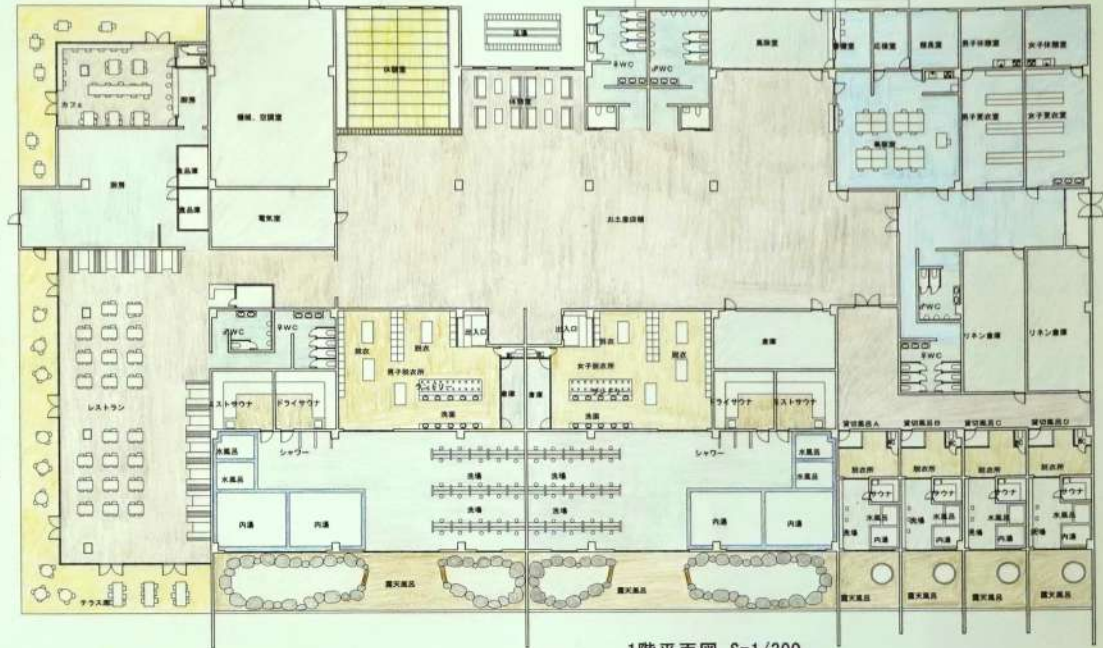
- ・周辺にナイスアリーナやショッピングセンターがあり、子供から高齢者まで多くの人が集まる
- ・国道に沿った場所であるため、交通機関も整っている
- ・周辺には住宅地もあるが、林や道路に隔られている

3. 長屋旅館

客室は昔ながらの長屋にするために、横に長く連なるように配置した。客室へと続く通路には「こみせ」を設け、雨や雪の日も快適に移動できるようにした。フロント・大浴場・レストランは客室と分け、一般の方も利用しやすいようにした。



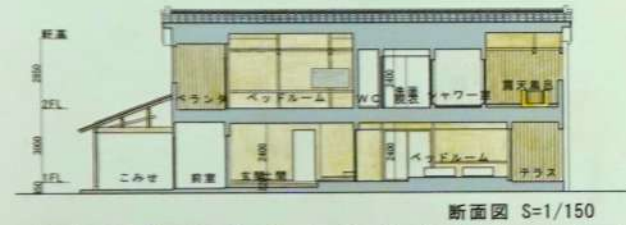
入口の開口部の格子部分に秋田杉を使用し、和紙合わせガラスにすることで昔ながらの長屋を再現する。



1階平面図 S=1/300

2. 現在の秋田県

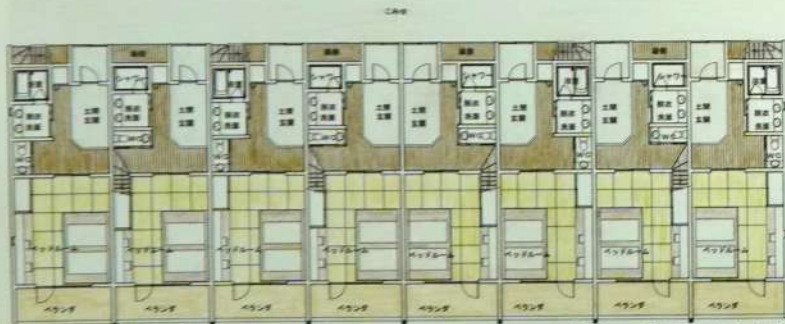
現在の秋田には、深刻な人口減少や若年層の都市部への流出などといった課題がある。地域社会の担い手が減り、経済活動の維持が危ぶまれる中で、活力を取り戻すための取り組みが必要となっている。一方で、近年、ビジネスホテルの建設が進み、仕事などで訪れる人が増えている。しかし、仕事で訪れる人々は、「滞在」はするが秋田を「生活の場」としては選ばない。それに、機能的な宿泊施設が増える一方で「地域の人との関わり」や「秋田らしいあたたかさ」を感じられる場所は少ない。そこで本計画では、観光客だけでなく、仕事で訪れる人にも秋田の魅力を感じてもらい、滞在を通して「このまちに暮らしたい」と思える建築を目指す。



断面図 S=1/150



ベッドスペースを小上がりにし、畳と洋室、どちらの空間でも安らぐことができるようにする。



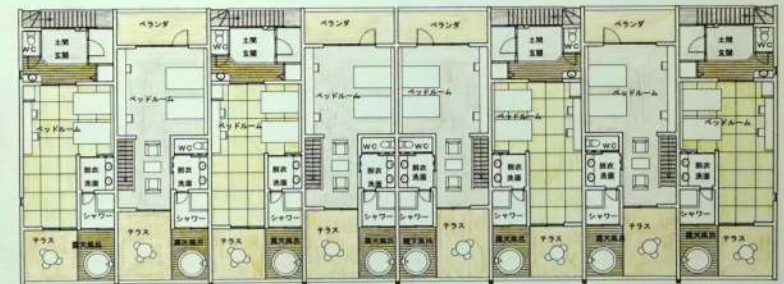
客室 1階平面図 S=1/200



玄関を土間スペースにすることで部屋に入った瞬間からゆったりすることができる空間になる。



露天風呂を2階に配置し、プライバシーを確保



2階平面図 S=1/200

